

学校週5日制実施における児童・生徒、家庭、地域の状況に関する調査研究

《抄録》

本研究は、学校週5日制が完全実施されてから3年目を迎えるに当たり、児童・生徒及び保護者・家庭への調査研究（質問紙法）を実施して、今後の学校の在り方や指導の方向性を提示することをねらいとする。

調査の視点は、次の3点である。

児童・生徒の生活実態を経年変化を踏まえながら明らかにすること。

児童・生徒の休日の過ごし方の特徴を活動の場や頻度の把握にとどめることなく、過ごし方の意識を含めてとらえること。

児童・生徒の休日の過ごし方と学校及び家庭での過ごし方との関連を把握することで、家庭への支援をも含め、今後の学校の在り方や指導の方向性の手掛かりを得ること。

調査の結果、次のことが明らかになった。

児童・生徒の自宅での学習時間が総体的に減少してきていることや、遅寝・遅起といった基本的な生活習慣の乱れ、家庭での会話やふれあいの極端な欠如といった現状があること。また、起床時刻や就寝時刻などは、平日と休日とが一体的・連続的な関係にあること。

児童・生徒の休日の過ごし方として、例えば、中学校における部活動のように頻度の両極化傾向が見られることや、全体的にボランティア活動や地域活動などの機会が十分でないこと。さらに、休日（自由な時間）を計画的・主体的に使う力の有無が、休日の過ごし方を豊かにする原動力になること。

休日を計画的・主体的に使う力は、日頃の学校での過ごし方、とりわけ考え続ける力の育成や体験的な活動などと結び付いていること。それらは、保護者や家族との会話頻度やふれあいとも関連していること。

家庭の教育力や地域の教育力を高めていく上で、保護者・家庭への働きかけを通じた学校からの働きかけが大きな役割を果たすこと。

以上の結果を踏まえ、今後の学校の在り方と指導の方向性を提示した。

目 次

研究の視点と方法	63
1 研究の背景とねらい	
2 研究の方法	
学校週5日制時代における児童・生徒	65
1 経年変化からとらえた生活時間等の実態	
2 学年比較による生活時間等の実態	
幼児・児童・生徒の休日の過ごし方	70
1 幼稚園児の休日の過ごし方	
2 児童・生徒の休日の過ごし方	
3 休日の過ごし方の分類とその特徴	
児童・生徒の休日を過ごしているときの意識	78
1 休日の過ごし方に関する4つのタイプ分け	
2 休日の過ごし方のタイプと学校での様子	
3 休日の過ごし方のタイプと家庭の様子	
学校週5日制実施における保護者・家庭の対応	83
1 保護者・家庭での取組み	
2 家庭の教育力、地域の教育力を高める学校の役割	
研究のまとめ	86
1 調査研究を通して明らかとなったこと	
2 学校の在り方と指導の方向性	
3 今後の研究課題	

研究の視点と方法

1 研究の背景とねらい

平成14年度より、学校週5日制が完全実施となった。教育改革の一環として実施されることとなった学校週5日制の趣旨は、第一に、幼児、児童、生徒の家庭や地域社会での生活時間の比重を高めること、第二に、子どもたちが主体的に使える時間を増やすこと、そして第三に、学校、家庭、地域社会がそれぞれの役割を明確にして、相互に連携していく中で、子どもたちが社会体験や自然体験などの様々な活動を体験し、「生きる力」をはぐくむこと、とされている（文部科学省『完全学校週5日制の実施について（通知）』平成14年3月）。現在、各学校では、完全実施2年目までの活動を評価し、教育課程の編成をはじめとして、行事の精選、保護者・家庭、地域社会への新たな働きかけなど、様々な対応を試みている。

東京都教育委員会による教育課程調査によれば、平成13年度から14年度に、教育目標達成の基本方針づくりに「学校週5日制の趣旨を生かす」を重視するとした割合が急増している（例えば小学校で14.4%から46.1%）。また、「基礎・基本」「授業改善」「地域の教材化」「家庭・地域との連携」といった項目に指導の重点をおく傾向が見られるなど、地域の特性や児童・生徒の実態に応じた特色ある教育課程の編成・実施に向けて、工夫・改善が進められている。

このような状況を踏まえ、本研究は、学校週5日制完全実施が3年目を迎えるに当たり、児童・生徒及び保護者・家庭への調査研究（質問紙法）を実施して、今後の学校の在り方や指導の方向性を提示することをねらいとする。

2 研究の方法

学校週5日制実施にかかわる調査研究は、文部科学省をはじめ、自治体、民間団体等、多くのものがある。概してその特徴は、児童・生徒が休日に過ごす場や活動内容の回数は尋ねているものの、児童・生徒の生活全般への理解や休日を過ごす際の意識への言及はそれほど多いとは言えないものである。また、保護者対象の調査では、保護者自身が学校週5日制の趣旨をどのように理解し、生かそうと取り組んでいるかといった設問は、少ないように思われる。

文部科学省が実施した『完全学校週5日制の実施に伴う事業の実施・子どもたちの参加状況に関する調査』（平成14年10月）の結果は、半数以上の児童・生徒が、毎週土曜日が休みになり「よかった」と答えたものの、「することがなくてつまらない」と回答した児童・生徒が3人に1人に及んでいるというものであった。そして、この調査結果に対する反応の多くは、土曜日の活動をもっと面白くすることや、参加しやすい条件を整備することが課題の解決につながるというものではあったが、「することがなくてつまらない」と回答したのはどのような児童・生徒なのか、児童・生徒にどのような力をはぐくむことが必要であるのか、そのために、学校や保護者・家庭、地域社会の大人たち自身が、どのような取り組みをしていくべきかといった言及が十分であったとは言えない。

そこで本研究では、以下の点に留意して調査研究を進めることにした。

児童・生徒の生活実態を経年変化を踏まえながら明らかにすること。

児童・生徒の休日の過ごし方の特徴を活動の場や頻度の把握にとどめることなく、過ごし方の意識を含めてとらえること。

児童・生徒の休日の過ごし方と学校及び家庭での過ごし方との関連を把握することで、家

庭への支援をも含め、今後の学校の在り方や指導の方向性の手掛かりを得ること。

「児童・生徒対象調査」及び「保護者対象調査」の概要は以下の通りである。

「児童・生徒対象調査」

調査項目

- ア 生活時間に関する項目（過去の調査項目と同様の質問）
- イ 時間の使い方等に関する項目（12項目）
- ウ 休日の過ごし方に関する項目（16項目）
- エ 学校での様子（「生きる力」等）に関する項目（15項目）
- オ 休日が増えたことに伴う家庭・家族の変化に関する項目（8項目）

調査の対象

- 都内公立小学校第5学年及び第6学年児童（13校）
- 都内公立中学校第1学年及び第2学年生徒（9校）
- 都立高等学校第1学年及び第2学年生徒（10校）
- 都立ろう学校及び養護学校高等部第1学年及び第2学年生徒（6校）

調査の規模 各学年 300名程度

調査時期 平成15年11月1日～30日

「保護者対象調査」

調査項目

- ア 園児の基本的な生活習慣 幼稚園のみ に関する項目
- イ 児童・生徒の休日の過ごし方に関する項目（16項目）
- ウ 子どもとのかかわり方に関する項目（10項目）
- エ 学校への取組みに関する項目（15項目）
- オ 休日の増加に伴う家庭・保護者の取組みに関する項目（12項目）

調査の対象：児童・生徒対象校と同一

- 都内公立幼稚園4歳児及び5歳児の保護者（9園）
- 都内公立小学校第5学年及び第6学年保護者
- 都内公立中学校第1学年及び第2学年保護者
- 都立高等学校第1学年及び第2学年保護者
- 都立ろう学校及び養護学校高等部第1学年及び第2学年保護者

調査の規模 各学年 300名程度

調査時期 平成15年11月1日～30日

『児童・生徒対象調査』の有効回答数

小学5年生	小学6年生	中学1年生	中学2年生	高等学校	ろう学校及び養護学校	全体
701人	696人	518人	406人	386人	173人	2880人

『保護者対象調査』の有効回答数

幼稚園	小学5年生	小学6年生	中学1年生	中学2年生	高等学校	ろう学校及び養護学校	全体
730人	771人	530人	447人	273人	542人	173人	3466人

学校週5日制時代における児童・生徒

1 経年変化からとらえた生活時間等の実態

表1は、旧都立教育研究所が26年前、16年前、7年前に実施した「児童の生活実態調査」における結果との比較から、今日の児童・生徒の特徴を明らかにしたものである(注1)。調査対象校(6校)及び質問の形式は、過去の調査と同様に設定した。起床時刻に関しては、集計の方法が異なるため、今回の結果のみを示した。

表1 26年前、16年前、7年前との比較(小学生5,6年生) 5年生:283人、6年生:279人

	昭和52年 (1977年)	昭和62年 (1987年)	平成8年 (1996年)	平成15年 (2003年)	平成15年(休日)
起床時刻				6時54分	8時6分
就寝時刻	22時30分	22時15分	22時40分	22時42分	22時48分
自宅での学習時間	91.6分	88.8分	66.0分	64.4分	
テレビ視聴時間	2時間41分	2時間49分	3時間12分	2時間41分	3時間42分
20分会話頻度/週	2.28回	3.50回	3.02回	3.38回	
毎日手伝いをする	18.1%	30.2%	30.1%	24.2%	
遊び人数(2人以下)	14.3%	14.7%	26.1%	27.7%	

まず、平日の平均就寝時刻は、今回の調査結果では22時42分であり、過去の調査結果と比較しても、総じて遅くなっている。休日(質問紙では「休日の前日の夜」)においては、さらに6分遅くなっている。

平日における自宅での平均学習時間(「塾以外の宿題や予習、復習など自分で勉強する時間」)は、昭和52年から調査の度ごとに減少している。今回の調査結果では64.4分とさらに短くなっている。あわせて、平日の自宅における平均学習時間が30分以下である児童の割合は、48.5%に及んでいることも明らかになった。

テレビの平均視聴時間は2時間41分であり、平成8年の結果と比べ約30分短くなっている。しかしながら、昭和52年及び昭和62年との比較では、それほど大きな変化があるとは言えない。休日については、平均視聴時間は3時間42分となり、平日より約1時間増えている。

1週間のうち20分以上家族と会話した回数については、今回の平均が3.38回であり、前回の3.02回に比べると若干増えている。この変化は、家庭・家族でのふれあいや会話の機会を促進する学校週5日制実施の趣旨に添うものである。しかし、その一方で家族との会話の機会が「ほとんどない」と回答した児童の割合が、全体の25%に及んでいることが、今回の調査結果から明らかになっている。

家庭での仕事(手伝い)について尋ねた結果は、毎日手伝いをする児童の割合が、前回、前々回の調査結果と比較しても、明らかに減少している。

遊びの人数に関しては、2人以下で遊ぶ割合が調査を経るごとに増えている。今回の調査結果からは、児童の3割近くが1人又は2人遊びとなっている。一般に子どもの遊び集団の成立は、5~6人以上といわれてきたが、児童の集団遊びの機会が、ますます乏しくなっている状況が今回の結果から推察できる。

2 学年比較による生活時間等の実態

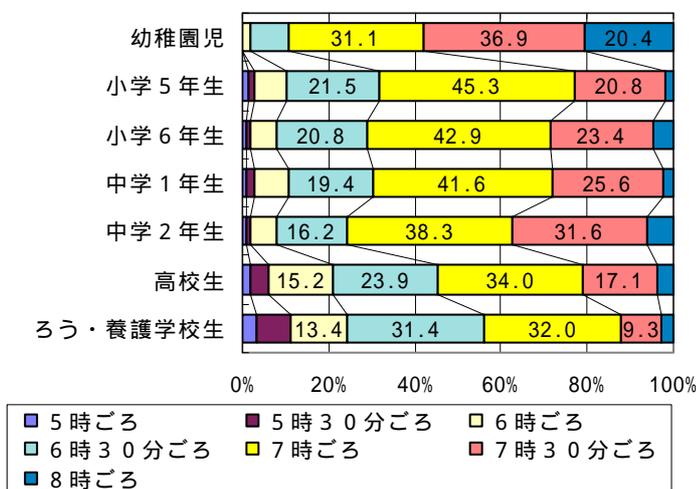
表2は、前節で示した項目を本調査の対象学年ごとに比較したものである。経年変化の特徴を踏まえながら、学年による違いを検討した。なお、幼稚園児の回答は『保護者対象調査』の結果を活用した。また、調査対象児童数(小5・小6)は、26年前の調査以来の経年変化比較校に新たに7校分を加えた数値である。

表2 学年比較による生活時間等の特徴

	幼稚園児 (730人)	小学5年生 (701人)	小学6年生 (696人)	中学1年生 (518人)	中学2年生 (406人)	高校1・2年生 (756人)	ろう・養護学 校生(174人)
起床時刻 (平日)	7時20分	6時53分	6時58分	6時56分	7時03分	6時45分	6時36分
起床時刻 (休日)	7時42分	7時58分	8時10分	8時41分	9時11分	9時18分	8時30分
就寝時刻 (平日)	21時6分	22時21分	22時45分	23時03分	23時19分	23時36分	22時44分
就寝時刻 (休日)	21時30分	22時47分	23時15分	23時39分	24時04分	24時30分	23時20分
自宅学習時間 (平日)	-	64.2分	64.8分	59.4分	47.4分	41.4分	48.6分
テレビ視聴 時間(平日)	2時間30分	2時間44分	2時間45分	2時間49分	2時間40分	2時間19分	2時間43分
テレビ視聴 時間(休日)	2時間54分	3時間49分	3時間48分	4時間41分	4時間22分	3時間54分	4時間12分
20分会話頻 度/週	-	3.50回	2.84回	2.84回	2.96回	3.03回	3.35回
毎日手洗い	-	21.7%	25.8%	27.0%	20.0%	22.3%	30.0%

まず、平日の平均起床時刻については、幼稚園児が7時20分、小学生と中学生がおおよそ午前7時前後、高校生がそれより若干早く、ろう学校及び養護学校の生徒が最も早くなっている。

グラフ1 起床時刻(平日)



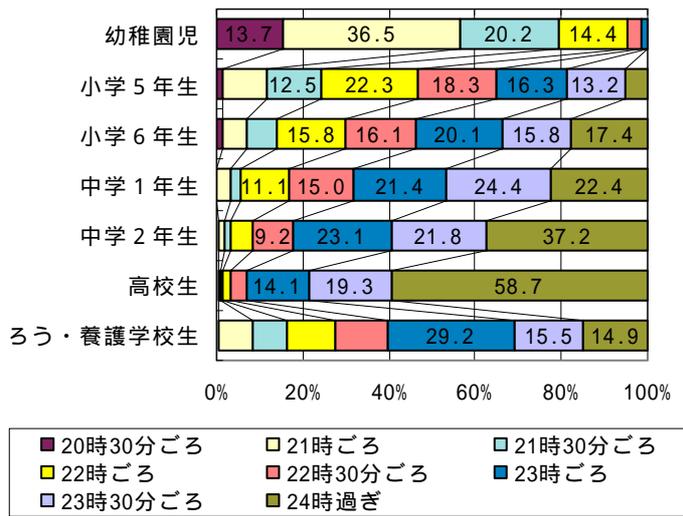
グラフ1からは、幼稚園児では、7時30分以降に起床する割合が半数を超えており、そのうち8時以降が2割に達していることが分かる。身支度をし、朝食を食べることなどを考えると、時間の余裕がない状況が予想される。また、調査時期は11月ではあったが、今後小学校に入学することを考えると、全体として起床時刻をもう少し早くしていく必要があるように思われる。

幼稚園児に次いで遅いのが、中学2年生である。7時30分以降に起きる生徒の割合は約38%に達している。

休日の起床時刻は、平日に比べ各学年とも遅くなっており、中学2年生以上では9時を過ぎている。平日と休日の起床時刻の差は、幼稚園児 22分、小学5年生 65分、小学6年生 72分、中学1年生 105分、中学2年生 128分、高校生 143分、ろう学校及び養護学校の生徒が114分となっており、中学2年生と高校生では、平日と休日の起床時刻の差が2時間以上ある。

就寝時刻は、経年変化の結果からも総じて遅くなってきていることが分かったが、今回の調査における平日の平均就寝時刻は、

グラフ2 就寝時刻(平日)



小学校6年生が22時45分、中学生以上で23時を過ぎ、高校生では23時36分であった。本調査では、帰宅時刻を尋ねてはいないが、仮に中学生の帰宅時刻を部活動、学習塾等を経て19時ごろと設定すると、就寝時刻の23時までの4時間に、夕食、入浴、テレビ視聴、家族の会話、家の手伝い、自宅学習など、多くの生活時間がここに含まれる。調査結果では、中学2年生の平日のテレビ視聴時間の平均が2時間40分となっ

ていることから、この時間を差し引いた残りの時間(1時間20分)で、他の様々な事柄がなされることになる。中学生の多くがその他にパソコンやインターネットなどを行っていることが調査から明らかになっていることから、グラフ2に見られるように、24時以降に就寝している生徒の割合が、中学生で約3割、高校生では約6割に達しており、夜更かしの実態は容易に推察できる。

ところで、一般に起床時刻と就寝時刻との間には何らかの関係(例えば「遅く寝れば、遅く起きる」など)があると考えられるが、今回の調査結果からは、小学校、中学校ともに、平日と休日との間にも関係があることが分かった。

表3、4は、起床時刻の設問と就寝時刻の設問との間の相関係数を表したものである。いずれも統計的な数値としては正の相関関係(例えば「小学5・6年生において、平日の起床時刻が早い児童は、平日の就寝時刻も早い」といった関係)が認められた。

表3 起床時刻と就寝時刻の関係(数値は相関係数)

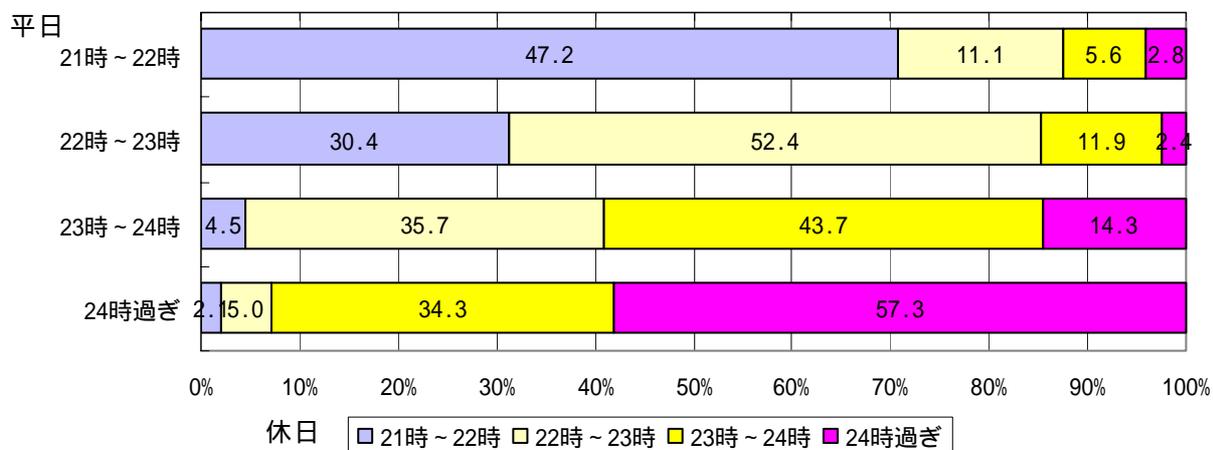
小学5・6年生		起床時刻		就寝時刻	
		平日	休日	平日	休日
起床時刻	平日		0.31	0.27	0.25
	休日	0.31		0.24	0.31
就寝時刻	平日	0.27	0.24		0.69
	休日	0.25	0.31	0.69	

表4 起床時刻と就寝時刻の関係(数値は相関係数)

中学1・2年生		起床時刻		就寝時刻	
		平日	休日	平日	休日
起床時刻	平日		0.24	0.28	0.24
	休日	0.24		0.27	0.39
就寝時刻	平日	0.28	0.27		0.66
	休日	0.24	0.39	0.66	

今回の調査で、特に顕著（相関係数が高い値を示した）であったのは、小学生、中学生ともに、平日の就寝時刻と休日の就寝時刻との関係である。中学生の場合をグラフ3に示した。

グラフ3 平日の就寝時刻と休日の就寝時刻の関係(中学1・2年生)

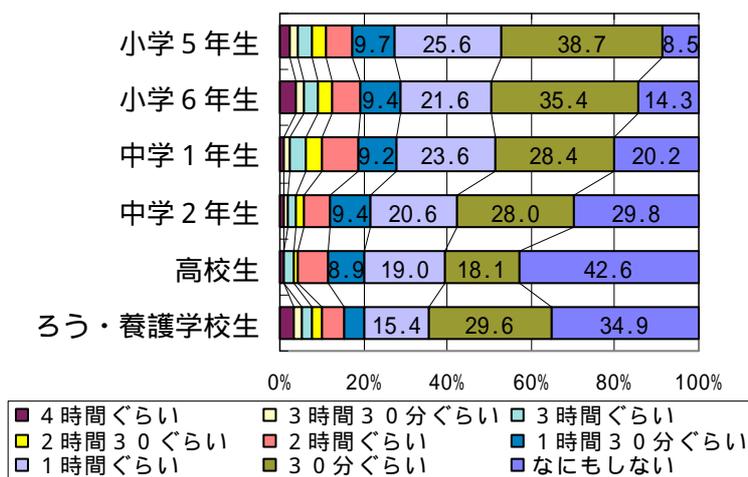


グラフの特徴として、平日の就寝時刻が早い生徒は休日の就寝時刻も早い、反対に、平日の就寝時刻が遅い生徒は休日の就寝時刻も遅い、といった関係を確認することができる。ここからは、平日と休日の過ごし方（生活時間等）を一体的・連続的なもの、両者の間に何らかの関連があるものとしてとらえていく必要があると言える。

自宅での学習時間（平日）については、経年変化の結果、調査の度ごとに平均時間数が減少していた。今回の調査では、小学5年生では平均64.2分、小学6年生では64.8分と、かろうじて1時間程度を確保している。しかし、中学生以上になると、中学1年生が59.4分、中学2

年47.4分となり、高校生では41.4分、ろう学校及び養護学校の生徒で48.6分となっている。

グラフ4 自宅での学習時間(平日)



さらに、グラフ4からは、「なにもしない」と回答した生徒の割合が、中学生で約25%、高校生で40%を超えていることが分かる。総計すると、平日、自宅での学習時間が1時間に満たない児童・生徒の割合は、全体の54.8%に及ぶことが分かった。

また、次頁の表5は、自宅での学習時間と平日のテレビ視聴時間及び休日の通塾との関連を表したものである。

ここからは、「何もしない」生徒の特徴の一つとして、平日のテレビ視聴時間が長いこと、休日には塾へ行っていない割合が高いことが分かる。

本調査では、自宅での学習時間が減ってきている要因を限定するまでには至っていないが、単に、学習の場や機会が変わったと判断するよりも、総体として学習時間が減ってきており、学習をしている児童・生徒としていない児童・生徒との差が拡大しつつあるように思われる。

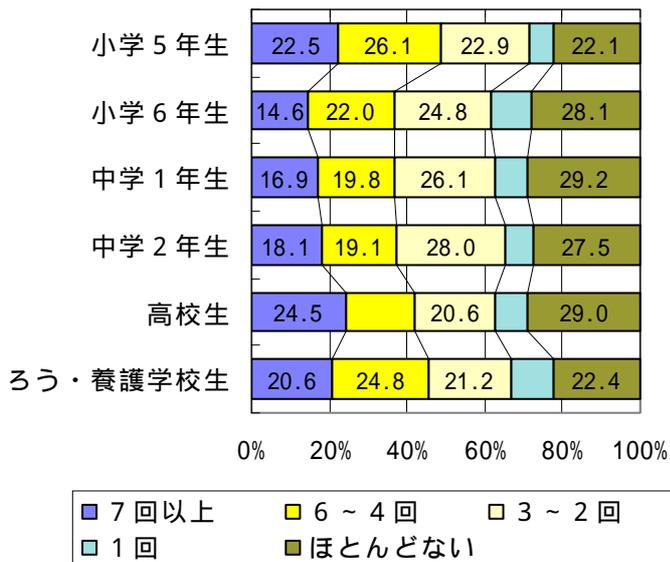
表5 自宅での学習時間とテレビ視聴時間及び休日の通塾(中学生)

自宅での学習時間	平日のテレビ視聴時間	休日には塾へ行かない割合
何もしない	3時間10分	55.7%
1時間ぐらい	2時間45分	49.4%
2時間ぐらい	2時間28分	41.3%

最後に、家族との会話の頻度についてである。経年変化の結果からは、前回の調査結果を若干上回り、総じて会話の時間が増えてきているようにも思われた。しかし、グラフ5にも見られるように、家族との会話の機会が「ほとんどない」と答えた割合が、小学校で約25%、中学校、高等学校で30%弱となっている。一般に、思春期にさしかかるにしたがって家庭での会話の回数は少なくなると考えられがちであるが、今回の結果からは、「ほとんどない」という割合は、小学6年生から高校生まで変わりがなかったことが分かった。

以上、生活時間等に関する調査の結果から、今日の幼児・児童・生徒の生活実態について、その特色を整理すると、以下の5点になる。

グラフ5 家庭での会話頻度(20分以上/週)



- ア 平日、休日を問わず全体として夜更かしになっているということ。
- イ 平日と休日の過ごし方(生活時間等)は、一体的・連続的にとらえられること。
- ウ 半数以上の児童・生徒が平日自宅において学習していないこと。
- エ 家族との会話の回数は、ほとんど会話がないという状況も校種を問わず4人に1人程度存在しており、それは単純に児童・生徒の発達段階によるものとは判断できないこと。
- オ 項目によっては、「両極化」状況(例えば、極端な遅寝・遅起、ゼロに近い家庭での学習時間、極端に多いテレビ視聴時間、家での会話回数の極端な欠如など)が生じてきていると推察できること。

それでは、このような生活実態にある幼児・児童・生徒たちは、現在、休日をどのように過ごしているのだろうか。

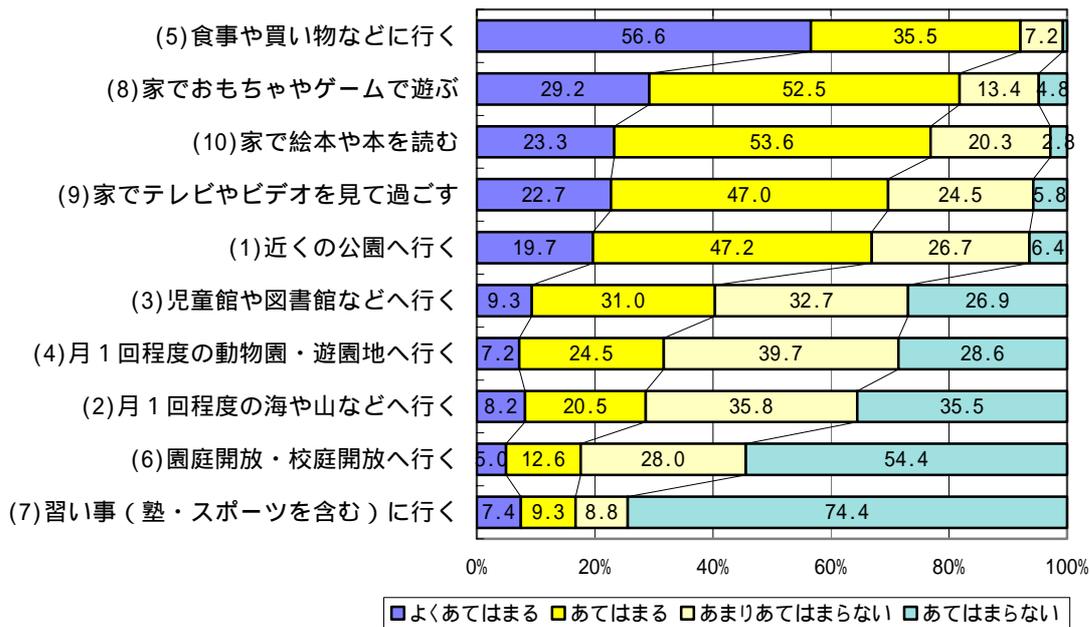
(注1)・「子どもの発達と生活環境についての実証的研究 - 子どもの10年前の生活・遊びと今日の実態を比較して - 」『東京都立教育研究所紀要』第31号 昭和62年度
 ・『子どもの生活体験と生活環境に関する実証的研究』(南里悦史他)平成9年3月

幼児・児童・生徒の休日の過ごし方

1 幼稚園児の休日の過ごし方

グラフ6は、幼稚園児の休日の過ごし方について（『保護者対象調査』より）、回数の高い順に並べたものである。「よくあてはまる」では「食事や買い物などに行く」の割合が高く56.6%であった。「よくあてはまる」「あてはまる」までを含めると「家でおもちゃやゲームで遊ぶ」「家で絵本や本を読む」など上位3つまでの過ごし方が70%を超える回答となっていることから、幼稚園児の休日は、基本的には自宅で保護者や家族と過ごすことが多いことがわかる。

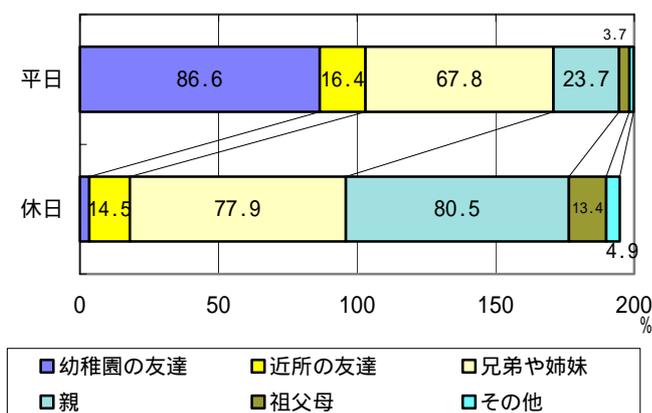
グラフ6 休日の過ごし方（幼稚園児）（730人の保護者回答）



一方、下位の5つの項目では、「よくあてはまる」と回答した割合にそれほど違いが見られない。「習い事」も7.4%に及んでいる。また、「月1回程度、動物園や遊園地などに行く」「月1回程度、海や山などの自然の中で遊ぶ」は、「よくあてはまる」「あてはまる」を含めると、両者ともに約30%となっている。「園庭開放・校庭開放」は、約20%であった。

続いて、平日と休日の遊び相手を尋ねた結果がグラフ7である。平日は「幼稚園の友達」が86.6%で最も高く、次いで「兄弟や姉妹」67.8%、「親」23.7%となっている。休日は「親」80.5%、

グラフ7 遊びの相手（平日と休日の比較）（複数回答）



「兄弟や姉妹」77.9%、「祖父母」13.4%の順になっている。

平日から休日への変化では、まず「幼稚園の友達」の急減があげられる。休日に「幼稚園の友達」と遊ぶ園児は、わずか3.4%である。「近所の友達」も漸減しているのに対して、遊びの相手として、「親」が3.4倍、「祖父母」が3.6倍に増えている。

2 児童・生徒の休日の過ごし方

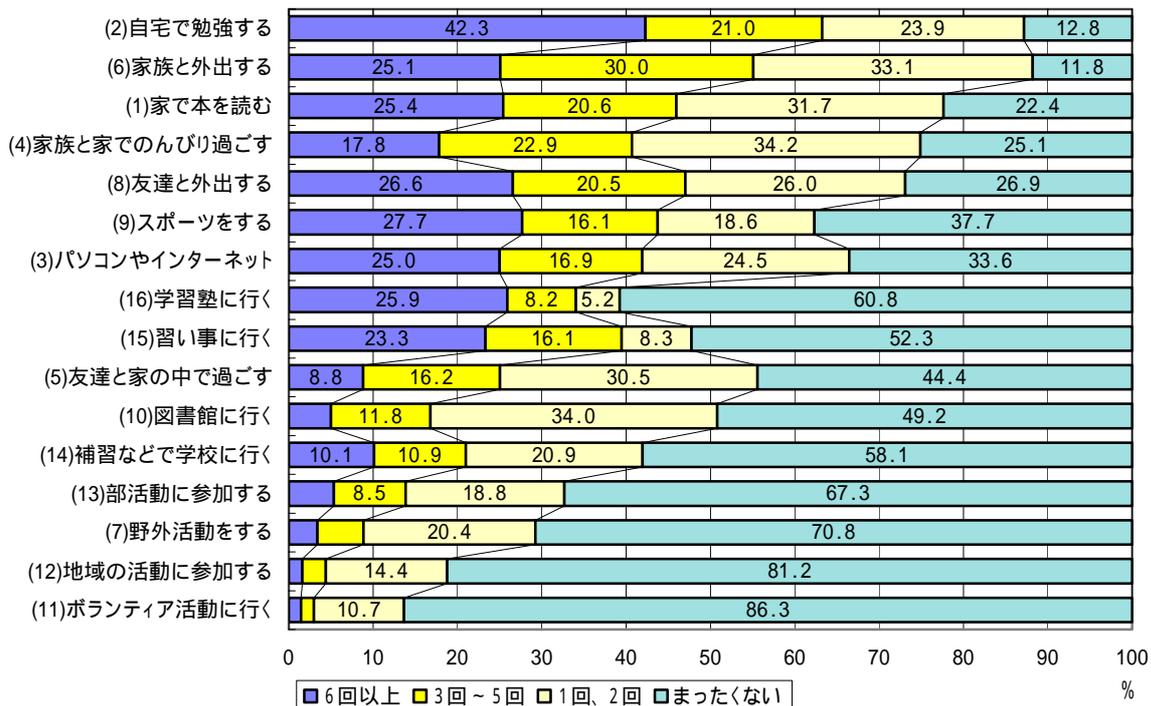
児童・生徒の休日（最近1か月）の過ごし方について、活動内容ごとにその回数を「6回以上」「3～5回」「1、2回」「まったくない」の4つの選択肢により尋ねた。

(1) 小学生(5・6年生)

グラフ8は、小学生（5年生と6年生を合わせた）の結果である。回数を尋ねたこともあって「自宅で勉強する」の回数が高くなっている。それでも1か月のうち1回でもあったと回答した割合では「家族と外出する」が最も高くなっている。次いで回数の高かった活動としては、「家で本を読む」「家族と家でのおんぼり過ごす」「友達と外出する」「スポーツをする」「パソコンやインターネットをする」となっている。全体的に保護者や家族と過ごす割合が高くなっているものの、友達とのかかわりや自身の活動への広がりが感じられる。

また、「学習塾に行く」「習い事に行く」は、「6回以上」が20%を超える一方で、「まったくない」も50%を超えるなど、回数の高い低いにおいて両極化の傾向が見られる活動である。さらに、「野外活動をする」「地域の活動に参加する」「ボランティア活動に行く」が1回でもあった児童は、それぞれ29.3%、18.2%、13.6%であった。

グラフ8 小学生(5・6年)の休日の過ごし方

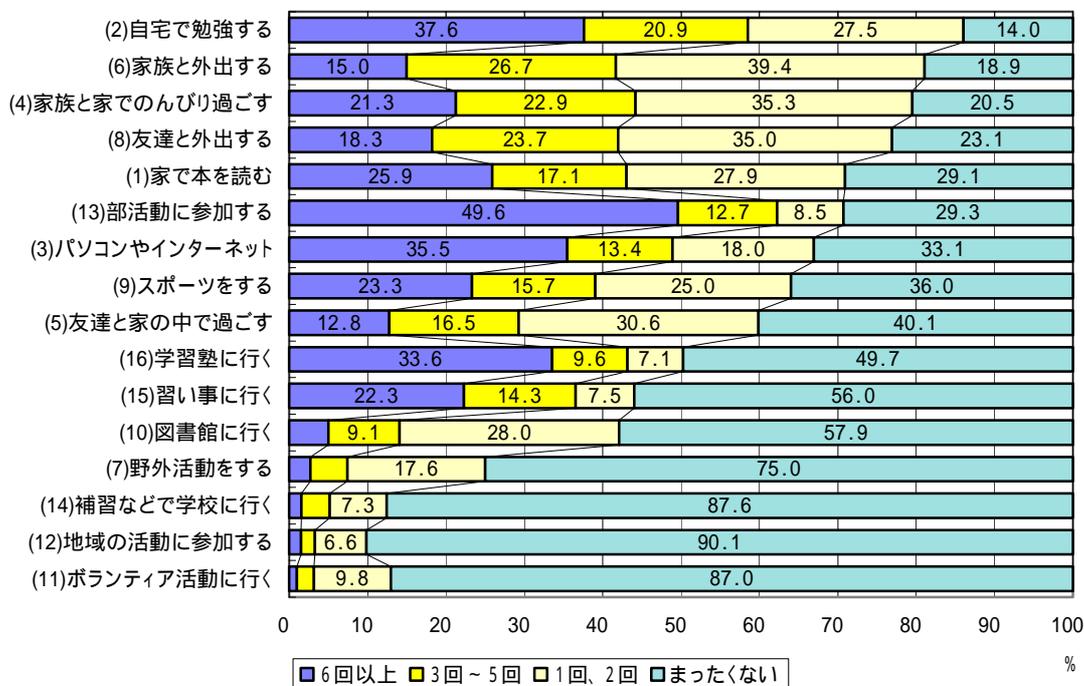


(2) 中学生(1・2年生)

中学生の休日の過ごし方を、次頁のグラフ9に示した。1か月のうち1回でもあったと回答した割合の高い活動としては、小学生に比べると若干頻度が低下するものの、保護者や家族と過ごす内容があげられており、小学生と同様の傾向が見られる。こうした中であって、中学生の特徴は、「6回以上」の活動として「部活動に参加する」が49.6%に及んでいることであり、休日のかなりの時間を部活動によって過ごしている生徒が半数程度いることがうかがえる。し

かし、部活動に参加することが「まったくない」と回答した生徒も 29.3%存在することから、部活動は、頻度の両極化が顕著な活動であることがわかる。同様の傾向は、「パソコンやインターネットをする」「学習塾に行く」「習い事に行く」などの活動にも見られ、小学生に比べると活動が全体的に固定化してきている傾向が見られる。

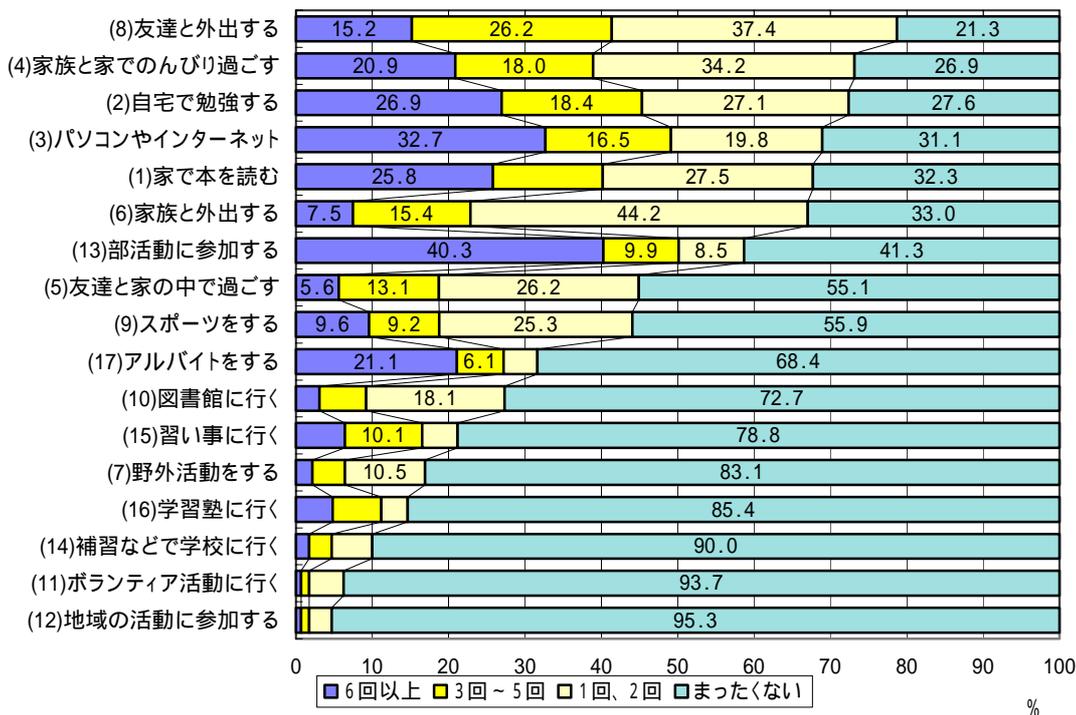
グラフ9 中学生(1・2年)の休日の過ごし方



(3) 高校生(1・2年生)

高校生の休日の過ごし方として、1か月のうち1回でもあったと回答した割合が最も高かった

グラフ10 高等学校生(1・2年)の休日の過ごし方

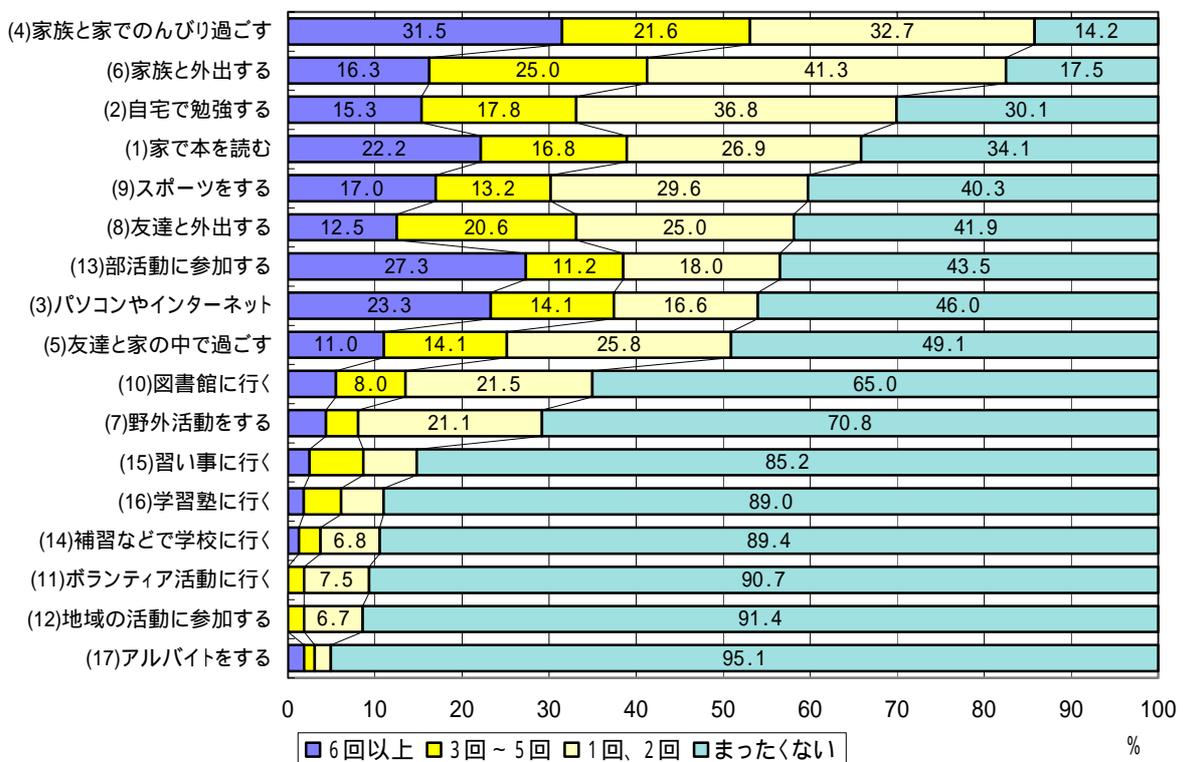


た活動は「友達と外出する」78.7%であった。「部活動に参加する」に関しては、中学生同様に頻度の両極化傾向が見られる。また、1回でもあった活動の中で「6回以上」の割合が比較的高い活動は、「アルバイトをする」「パソコンやインターネットをする」などであり、中学生と比べると、個人を基本とした活動への広がりを確認することができる。

(4) ろう学校及び養護学校の生徒(高等部)

ろう学校及び養護学校の生徒の休日の過ごし方として、1か月のうち1回でもあったと回答した割合が高かった活動は、「家族と家でのおんびり過ごす」「家族と外出する」であり、共に80%を超えている。グラフ11の上位からは、基本的に休日は保護者や家族と過ごすことが多いことがうかがえる。また、「部活動をする」の「6回以上」の割合は27.3%であった。

グラフ11 ろう・養護学校生(高等部)の休日の過ごし方



(5) 「家族と家でのおんびり過ごす」「家で本を読む」

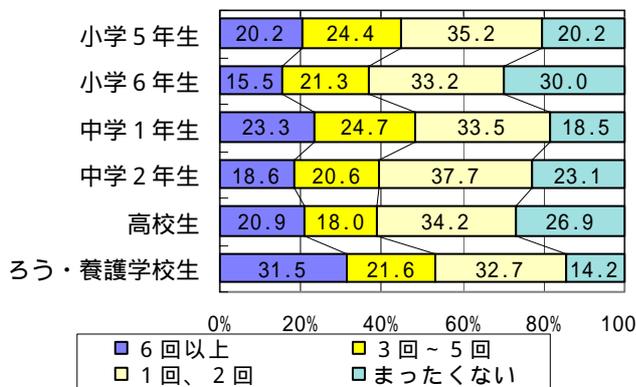
学年ごとの特徴に加え、「家族と家でのおんびり過ごす」及び「家で本を読む」の活動について、学年比較を試みたのが次頁のグラフ12とグラフ13である。

まず、全体として、学年を問わず20%前後の児童・生徒が、家でのおんびりしていたり、本を読んだりしていることが分かる。

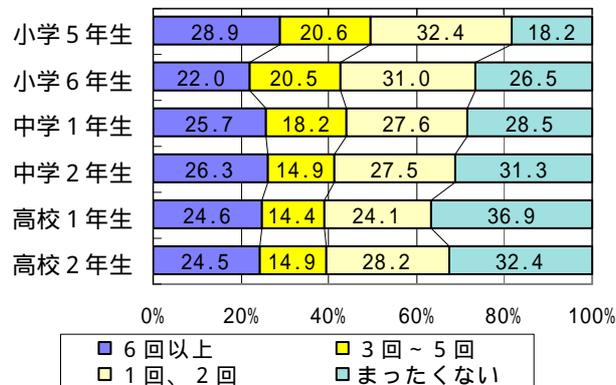
この約2割が、固定した2割(「学年内において」又「学年間において」)であるかどうかについては、今回の調査からでは判断できない。しかしながら、例えば、「家族と家でのおんびり過ごす」のグラフが、先に示した生活時間「家庭での会話頻度」(69頁)のグラフと極めて類似していることなどを考えると、家庭での親子をはじめとする人間関係が、休日の過ごし方と関連があることが予想される。

さらに、仮にこの2割が固定したものである（「まったくない」も同様）とすれば、子どもが小さい頃からの親子関係は、中学生・高校生へと成長しても継続しており、そのことが「家族と家でのおんびり過ごす」といった休日の過ごし方となって現れていると考えられる。

グラフ 12 家族と家でのおんびり過ごす



グラフ 13 家で本(まんがを除く)を読む



また、「家で本を読む」という過ごし方についても、同じような仮定に立てば、小さい頃からの読書習慣や経験というものが、その後も継続していると考えられる。現在、東京都教育委員会は『東京都子ども読書活動推進計画』(平成15年3月策定)を推進しているが、「学校においては、子どもが読書に親しむ態度を育成し、読書習慣を形成するとともに、学校図書館を計画的に利用し、子どもの主体的な読書活動を充実させる」ことは、学校週5日制が実施されたことに伴う学校における重要な役割の一つであると考えられる。

以上、児童・生徒の休日の過ごし方に関する特徴を活動の頻度にしたがって整理すると以下のようにまとめられる。

- ア 幼稚園児は、基本的に自宅を中心に保護者や家族と過ごすことが多く、「月1回程度、動物園や遊園地などに行く」「月1回程度、海や山などの自然の中で遊ぶ」を「よくあてはまる」「あてはまる」と回答している割合は、約30%となっている。
- イ 小学生は、「家で本を読む」「家族と家でのおんびり過ごす」など、全体的には保護者や家族と過ごす割合が高くなっているものの、「友達と外出する」「スポーツをする」など、友達とのかわりへの広がりも感じられる。
- ウ 中学生は、保護者や家族と過ごすなど小学生と同様の傾向が見られる一方で、休日のかなりの時間を部活動によって過ごしている生徒が半数程度存在する。部活動への参加は、頻度の両極化が顕著であり、同様の傾向が「パソコンやインターネットをする」「学習塾に行く」「習い事に行く」などの活動にも見られる。
- エ 高校生は、中学生と比べ「友達と外出する」「アルバイトをする」「パソコンやインターネットをする」など、個人を基本とした活動頻度が増してきている。
- オ ろう学校及び養護学校の生徒は、部活動に参加している場合を除いては、基本的に保護者や家族と過ごすことが多い。
- カ ボランティア活動や地域活動等社会体験活動への参加は、各学年とも1割程度である。
- キ 各学年とも20%前後の児童・生徒が、家でのおんびりしていたり本を読んだりしている。

3 休日の過ごし方の分類とその特徴

以下では、頻度の多い少ないという検討に加え、項目間の関連性から休日の過ごし方の分類を試みた。集計の方法は「因子分析法」を用い、小学校と中学校の結果を表6、表7に示した。

表6 休日の過ごし方の分類(小学校)

質問項目	因子1	因子2	因子3	因子4
(8)友達と外出する	0.753			
(9)スポーツをする	0.470			
(14)補習などで学校に行く	0.458			
(5)友達と家の中で過ごす	0.357			
(4)家族と家でのんびり過ごす		0.647		
(6)家族と外出する		0.505		
(3)パソコンやインターネット		0.291		
(11)ボランティア活動に行く			0.527	
(10)図書館に行く			0.454	
(7)野外活動をする			0.392	
(12)地域の活動に参加する			0.250	
(2)自宅で勉強する				-0.494
(16)学習塾に行く				-0.479
(15)習い事に行く				-0.355
(1)家で本を読む				-0.334

まず、小学校の場合には大きく4つに分類できることが分かった。第一は、「友達関係」と言える分類で、スポーツや補習などもここに属する。第二は、「家庭・家族関係」と言える分類である。第三は、「ボランティア活動に行く」や「図書館に行く」など「地域(活動)」との関係を中心とする分類である。そして第四は、「勉強や塾」に関する分類である。

中学校の場合には大きく3つの過ごし方に分類できることが分かった。第一は、「ボランティア活動に行く」「地域の活動に参加する」「野外活動をする」など「地域の活動や体験活動」

表7 休日の過ごし方の分類(中学校)

質問項目	因子1	因子2	因子3
(11)ボランティア活動に行く	0.594		
(12)地域の活動に参加する	0.483		
(7)野外活動をする	0.478		
(14)補習などで学校に行く	0.283		
(10)図書館に行く	0.222		
(9)スポーツをする		0.441	
(13)部活動に参加する		0.408	
(16)学習塾に行く		0.375	
(15)習い事に行く		0.362	
(8)友達と外出する		0.334	
(5)友達と家の中で過ごす		0.222	
(4)家族と家でのんびり過ごす			0.657
(6)家族と外出する			0.459
(2)自宅で勉強する			0.333
(3)パソコンやインターネット			0.239
(1)家で本を読む			0.221

に関する分類である。第二は、「スポーツ」と「部活動」に関連する分類である。そして第三は、「家族と家でのんびり過ごす」「家族と外出する」というように「家庭・家族関係」に関連する分類である。高等学校においては中学校とほぼ同様の傾向が見られた。

ここに見られた分類は、設問作成段階で、既にある程度の見通しをもったものではあったが、以下に、集計の結果を活用(過ごし方の分類の傾向がどの程度あるかを示す因子得点法を活用)して、まずは、休日の過ごし方と生活時間等との関連から、その特徴を探ってみよう。

因子分析とは、質問項目に対する回答者のパターン(どのような潜在的な要因(因子)から影響を受けているか)を探る手法の一つである。一般に、質問項目と各因子との相関係数=因子負荷量から因子を見つけ出す。また、各個人がそれぞれの因子の傾向をどの程度持っているかによって集計し、他の設問とのクロス集計などを行う。

表8は、先に分類した休日の過ごし方と生活時間等との関係を表したものである。網掛けを施してある箇所は、相関係数値±0.2以上で、両者の間に何らかの関連性が認められるものである。この関連性を検討することで、休日の過ごし方の特徴を把握してみたい。

表8 休日の過ごし方と生活時間等との関連

質問項目 \ 分類	小学5・6年生				中学1・2年生		
	友達関係	家庭・家族関係	地域・体験関係	勉強・塾関係	地域・体験関係	部活・スポーツ関係	家庭・家族関係
(1)起床時刻(平日)	0.03	0.07	0.12	-0.06	-0.09	0.01	0.04
(2)起床時刻(休日)	0.13	-0.03	0.07	0.04	-0.09	0.06	-0.07
(3)テレビ視聴時間(平日)	0.19	0.10	-0.08	0.39	0.04	-0.11	-0.02
(4)テレビ視聴時間(休日)	-0.16	-0.15	0.04	-0.27	-0.07	0.07	-0.01
(5)自宅学習時間	-0.14	0.01	0.13	0.25	-0.19	0.21	0.13
(6)遊びの人数	0.40	0.02	0.01	-0.12	-0.06	0.11	-0.13
(7)20分会話頻度/週	0.02	0.26	0.11	-0.11	-0.10	-0.08	0.36
(8)家での仕事(手伝い)	0.09	0.16	0.13	-0.07	-0.14	0.10	0.21
(9)就寝時刻(平日)	0.13	0.12	0.10	0.09	-0.08	-0.03	0.05
(10)就寝時刻(休日)	0.06	0.07	0.06	-0.01	-0.09	0.06	0.03

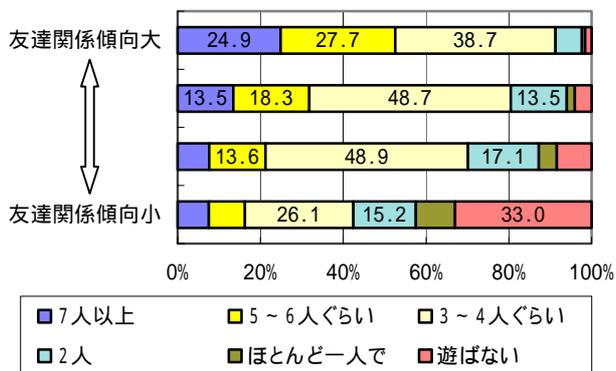
(数値は相関係数)

小学5・6年生では、「友達関係」の過ごし方と「遊びの人数」、「家庭・家族関係」の過ごし方と「20分会話頻度/週」、「勉強・塾関係」の過ごし方と「テレビ視聴時間(平日及び休日)」、「自宅学習時間」との間にそれぞれ何らかの関係性が認められた。

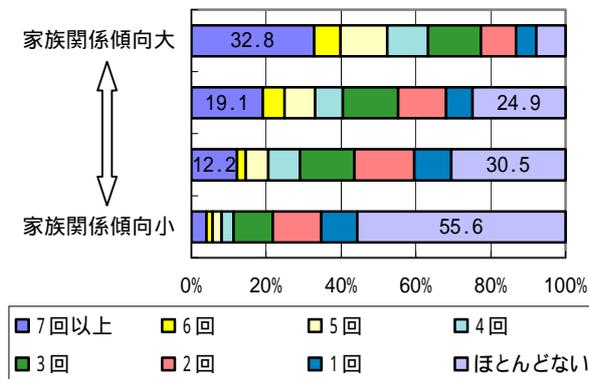
また、中学1・2年生では、「部活・スポーツ関係」の過ごし方と「自宅学習時間」、「家庭・家族関係」の過ごし方と「20分会話頻度/週」及び「家での仕事(手伝い)」との間に関連が見られた。「地域・体験活動」との関連はいずれも見られなかった。

網掛けを施した箇所のうち、その関連性の特徴を二つのグラフから探ってみた。

グラフ14 休日の過ごし方(友達関係)と遊びの人数(小学生)



グラフ15 休日の過ごし方(家庭・家族関係)と会話頻度(中学生)



まず、グラフ14からは、休日に「友達関係」の過ごし方をする傾向にある児童は、平日にも多くの友達と遊ぶ傾向にあることが分かる。また、グラフ15からは、休日に「家庭・家族関係」の過ごし方をする傾向にある生徒は、平日の「家族との会話の頻度」が多いことが分かる。どちらも、平日の過ごし方と休日の過ごし方との間に関連性が認められる項目である。

その他の網掛け部分に関しては、グラフによる詳細な検討は省略するが、以下にその特徴をまとめる。

小学生では、休日における「勉強・塾」関係の過ごし方と「テレビ視聴時間（平日／休日）」との関連から、休日に「勉強・塾」関係の過ごし方をする傾向がある児童は、平日のテレビ視聴時間が他の児童に比べ長い傾向にあり、休日は反対に短い傾向にあることが分かった。また、平日の「自宅学習時間」に関しては、長い傾向にある。

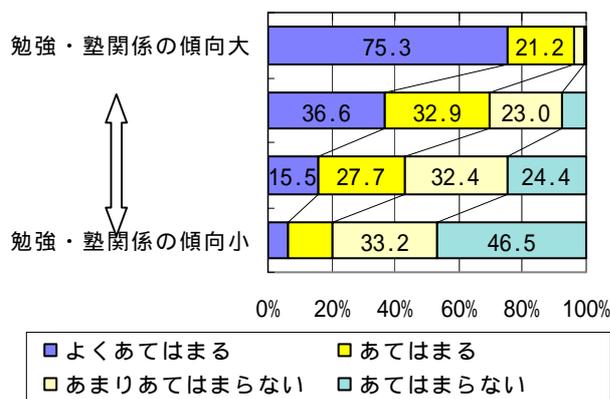
中学生では、休日における「部活・スポーツ関係」の過ごし方と平日の「自宅学習時間」との関連から、休日に「部活・スポーツ関係」の過ごし方をする傾向にある生徒は、平日の「自宅学習時間」に関しては長い傾向にある。また、「家庭・家族関係」の過ごし方をする傾向にある生徒は、「家での仕事（手伝い）」をする頻度も多い傾向にあることが分かった。

ここまでは、休日の過ごし方と平日の生活時間等との関係について検討してきたが、休日に勉強をしたり、部活動に行ったり、あるいはボランティア活動をする場合、その参加の意識や姿勢は、児童・生徒によって必ずしも一様でないように思われる。

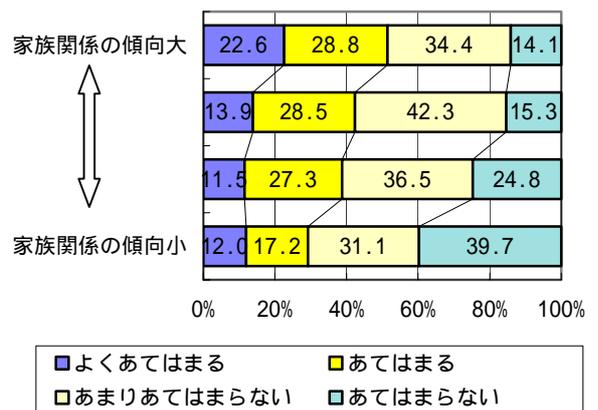
グラフ 16 は、休日の過ごし方として「勉強・塾」関係の過ごし方と「休日はやるべきことが多いか」との関連を示している。ここからは、休日に「勉強・塾」関係の過ごし方をする傾向がある児童は、休日はやるべきことが多いと感じていることが分かる。

またグラフ 17 は、休日の過ごし方として「家庭・家族関係」の過ごし方と「休日は計画を立て、自分のやりたいことを行う」との関連を示している。ここからは、「家庭・家族関係」の過ごし方をする傾向にある児童は、休日に計画を立て、自分のやりたいことを行うことが多いことが分かる。

グラフ 16 休日はやるべきことが多い
(小学5・6年生)



グラフ 17 休日は計画を立て、自分のやりたいことを行う
(小学5・6年生)



これらの結果は一例ではあるが、休日の過ごし方を考える際には、活動の頻度が多い少ないという量的な把握だけでなく、児童・生徒の意識や姿勢がどのようなものであるかといった質的な理解が必要であることが分かる。そして、この質的な理解から明らかになることが、平日の学校でより考えられなければならないことがらであると思われる。次章では、この視点に沿って、児童・生徒の休日の過ごし方について、さらに検討を進めることとする。

児童・生徒の休日を過ごしているときの意識

1 休日の過ごし方に関する4つのタイプ分け

第 章でも述べた通り、本研究は、児童・生徒に自由な時間を主体的・計画的に使いこなす

ていく力を育てていくこと、そのような力をはぐくむこととの関連で、学校や家庭のあり方を探っていくことが、学校週5日制時代における学校の役割を考えるきっかけになると考えた。

それゆえ、『児童・生徒対象調査』では、これまで述べてきた生活時間等に関する設問や休日の過ごし方を量で尋ねる設問に加えて、休日の過ごし方の意識や姿勢、計画性等を尋ねる設問と学校での様子をいわゆる「生きる力」との関係で尋ねた設問を用意し、それぞれの関連を探ることとした。

表9は、休日の過ごし方の意識や姿勢、計画性等を尋ねた12項目の質問を学年ごとに因子分析法によって検討した結果である。小学校、中学校、高等学校ともに2つの因子が認められた。

小学生の場合には、「やらなければならないことが多い」とその対極に「休日は自分のやりたいことがやれるのでうれしい」が位置する因子1と、「休日は計画を立てる」「自分で計画を立て行動する」といった因子2である。

中学校と高等学校の場合には、「特にやることがない日が多い」「休日はなにもしないで過ぎる」とその対極にある「休日はやるべきことが多い」が位置する因子1と「休日は計画を立て、自分のやりたいことを行う」「休日はやりたいことがやれてうれしい」といった因子2である。この結果から、全体として「因子1」を「休日における活動の多少」、「因子2」を「休日における計画性・主体性の高低」としてとらえることができる。

表9 休日の過ごし方(因子分析結果)

小学校	因子1	因子2
(1)やらなければならないことが多い	0.536	
(12)休日はやるべきことが多い	0.464	
(11)休日は友だちに合わせる	-0.245	
(10)休日はなにもしないで過ぎる	-0.374	
(6)特にやることがない日が多い	-0.463	
(7)休日はやりたいことがやれてうれしい	-0.467	
(8)休日は計画を立てる		0.564
(2)自分で計画を立て行動する		0.504
(4)部屋は自分で掃除する		0.357
(3)やりたいことに友だちを誘う		0.283
(9)休日は家族に従う		0.244
(5)時間割は前晩にそろえる		0.206

中学校	因子1	因子2
(6)特にやることがない日が多い	0.848	
(10)休日はなにもしないで過ぎる	0.514	
(1)やらなければならないことが多い	-0.293	
(12)休日はやるべきことが多い	-0.397	
(8)休日は計画を立てる		0.621
(2)自分で計画を立て行動する		0.472
(7)休日はやりたいことがやれてうれしい		0.383
(4)部屋は自分で掃除する		0.263
(3)やりたいことに友だちを誘う		0.252
(9)休日は家族に従う		0.244
(11)休日は友だちに合わせる		0.187
(5)時間割は前晩にそろえる		0.182

高等学校	因子1	因子2
(6)特にやることがない日が多い	0.724	
(10)休日はなにもしないで過ぎる	0.703	
(11)休日は友だちに合わせる	0.381	
(3)やりたいことに友だちを誘う	0.164	
(1)やらなければならないことが多い	-0.411	
(12)休日はやるべきことが多い	-0.635	
(8)休日は計画を立てる		0.722
(2)自分で計画を立て行動する		0.456
(7)休日はやりたいことがやれてうれしい		0.402
(9)休日は家族に従う		0.284
(5)時間割は前晩にそろえる		0.261
(4)部屋は自分で掃除する		0.212

この2つの因子を用いて休日の過ごし方を次の4つのタイプに分類し、これまで検討してきた幾つかの設問をタイプに応じて検討し直し、単に休日にやることが多いだけでなく、時間の使い方が計画的・主体的であることの意義を確認していきたい。

- Aタイプ：休日にやるが多く、計画的・主体的である。
- Bタイプ：休日にやるが多いが、計画的・主体的でない。
- Cタイプ：休日にやることは少ないが、計画的・主体的である。
- Dタイプ：休日にやることが少なく、計画的・主体的でない。

最初に、小学生と中学生の生活時間等との関連について、下記の表にまとめた。

まず、小学生(表10)では、休日にやることは少ないが、計画的・主体的でどちらかという
と休日を楽しみにしているCのタイプが、比較的早寝早起きであり、自宅での学習時間も多く、
家族との会話頻度も高い。これに対して、休日にやるが多いが、計画的・主体的でなく、

表10 休日の過ごし方タイプ分けと生活時間等(小学校)

	Aタイプ	Bタイプ	Cタイプ	Dタイプ
起床時刻(平日)	6時53分	7時6分	6時50分	6時58分
起床時刻(休日)	7時52分	7時58分	7時42分	7時50分
就寝時刻(平日)	22時22分	22時31分	22時34分	22時50分
就寝時刻(休日)	23時3分	22時58分	22時53分	23時7分
テレビ視聴時間(平日)	3時間10分	3時間16分	3時間12分	3時間10分
テレビ視聴時間(休日)	4時間1分	4時間7分	3時間32分	3時間56分
自宅学習時間	1時間	43分	1時間24分	1時間13分
20分家族との会話/週	3.44回	2.74回	3.74回	2.72回

どちらかという
とやらされているB
タイプは、最も遅
く寝て遅く起きて
おり、自宅学習の
時間及び、家族と
の会話頻度も少な
くなっている様子
が分かる。

中学生(表11)については、休日にやるが多く、計画的・主体的であるAタイプが、他
のタイプに比べ、早寝・早起きで、テレビ視聴時間が短く、自宅での学習時間が長く、家族と

表11 休日の過ごし方タイプ分けと生活時間等(中学校)

	Aタイプ	Bタイプ	Cタイプ	Dタイプ
起床時刻(平日)	6時53分	6時59分	7時1分	7時2分
起床時刻(休日)	8時7分	8時28分	8時10分	8時32分
就寝時刻(平日)	23時7分	23時15分	23時8分	23時14分
就寝時刻(休日)	23時26分	23時42分	23時35分	23時50分
テレビ視聴時間(平日)	2時間38分	2時間31分	2時間58分	3時間11分
テレビ視聴時間(休日)	3時間55分	4時間20分	4時間2分	4時間34分
自宅学習時間	1時間9分	51分	54分	37分
20分家族との会話/週	3.41回	2.75回	2.92回	2.69回

の会話頻度も高い
値を示しており、
やること多い状
況の中でも奮闘し
ている様子を見る
ことができる。

対照的に、休日
にやることが少な
く、計画的・主体
的でないDタイプ

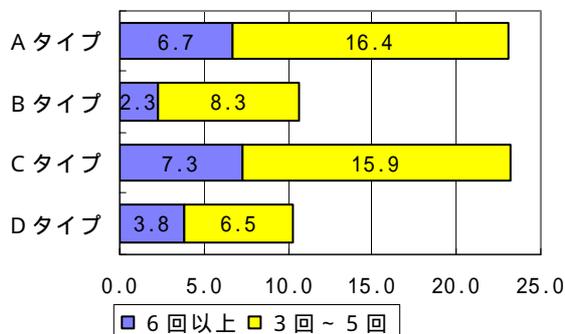
の日常生活の様子を考えると、自由な時間を主体的・計画的に使いこなしていく力を育て
いく必要性が改めて感じられる。

次に、休日の過ごし方(活動の頻度)とタイプ分けとの関連を見てみたい。頻度の順位こそ
低い、次頁の2つのグラフにタイプ分けの特徴を見ることができる。

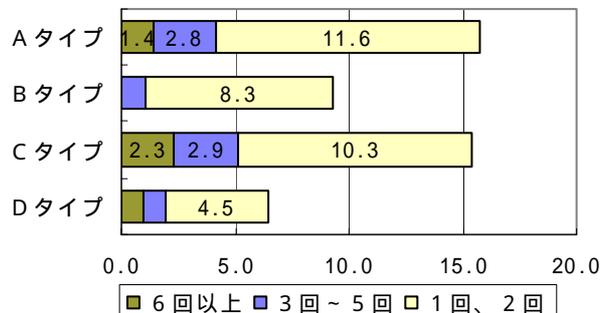
「図書館や博物館に行く」(小学5・6年生)と「ボランティア活動に行く」(中学1・2年

生)の結果である。いずれもAタイプとCタイプの児童・生徒の割合が高くなっている。またその中でも頻度の多い方では、Cタイプの方がAタイプよりも割合が高くなっていることも分かる。ここからは、明らかに「計画的・主体的である」という共通項が見えてくる。

グラフ18 図書館や博物館に行く
(小学5・6年生)



グラフ19 ボランティア活動に行く(中学1・2年生)



2 休日の過ごし方のタイプと学校での様子

休日の過ごし方に関する二つの因子、すなわち「活動の多少」と「計画性・主体性」のうち、とりわけ「計画性・主体性」の役割が大きいことが明らかとなってきた。ここで改めて、この二つの因子と児童・生徒の学校での様子を尋ねた設問との関連を検討してみることにする。

表12は、小学5・6年生の学校での様子と二つの因子の相関係数を表したものである。網掛け部分の特徴から、休日の過ごし方として「計画性・主体性」であることが、多くの項目と正

表12 二つの軸と学校の様子(小学5年・6年)

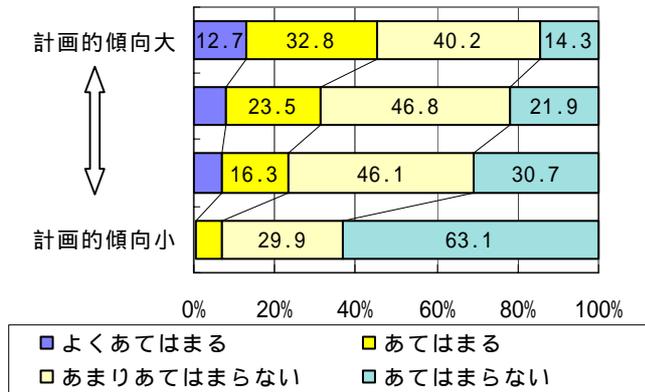
質問項目	因子	活動の多少	計画性・主体性
(1)国語の時間が楽しい		0.13	0.16
(2)算数の時間が楽しい		0.23	0.14
(4)「総合的な学習の時間」が楽しい		0.19	0.27
(5)部活動・クラブ活動が楽しい		0.06	0.16
(6)運動会や遠足が楽しい		0.13	0.24
(7)書かれたことはきちんとノートする		0.16	0.18
(8)宿題はちゃんとやっていく		0.15	0.17
(9)わからないことは先生に質問		0.02	0.24
(10)自分の理解度が分かっている		0.30	0.24
(11)さらに考えたり、調べたりする		0.20	0.36
(12)体験的学習から学んだ		0.17	0.25
(13)人のためになることは進んでする		0.19	0.28
(14)意見の違う人とも協力する		0.11	0.22
(15)役割は最後までやり抜く		0.17	0.33
(16)友達や先生と休日の話をする		0.06	0.30
(17)休日の体験が役立った		0.17	0.25
(18)休日の体験をクラブ等に生かす		0.08	0.26

(数値は相関係数 ±0.2以上に網掛け)

の相関にあることが分かる。

中でも「授業でやったことをさらに自分で考えたり、調べたりするようにしている」という項目との相関が他に比べて高かった。その詳細を次頁にグラフ20(次頁)に示した。ここからは、休日を計画的・主体的に過ごしている児童は、授業でやったことをさらに自分で考えたり、調べたりするようにする傾向があることが確認できる。網掛けを施した他の項目に関しても、同様の特徴を読みとることができる。

グラフ 20 授業でやったことをさらに自分で考えたり、調べたりするようにしている（小学5年・6年）



中学校と高等学校の結果については下表 13 に示した。「計画性・主体性」が多く項目と相関関係があることが認められる。

以上、休日の過ごし方に関する二つの軸と児童・生徒の学校での様子との関連を検討した結果、「計画性・主体性」の意義が確認できる。同時に、学校での取組みにおいても「計画性・主体性」をはぐくむ取組みを積極的に考えていく必要がある。

表 13 二つの軸と学校の様子(中学生・高等学校生)

質問項目	中学生(1・2年生)		高等学校(1・2年生)	
	活動の多少	計画性・主体性	活動の多少	計画性・主体性
(1)国語の時間が楽しい	0.10	0.14	0.02	0.14
(2)算数の時間が楽しい	0.13	0.16	0.04	0.06
(3)英語の時間が楽しい	0.14	0.18	0.07	0.11
(4)「総合的な学習の時間」が楽しい	0.09	0.17	0.05	0.11
(5)部活動・クラブ活動が楽しい	0.14	0.08	0.14	-0.06
(6)運動会や遠足が楽しい	0.18	0.18	0.19	0.10
(7)書かれたことはきちんとノートをとる	0.17	0.16	0.02	0.22
(8)宿題はちゃんとやっていく	0.20	0.25	0.07	0.23
(9)わからないことは先生に質問する	0.20	0.27	0.19	0.20
(10)自分の理解度が分かっている	0.20	0.24	0.11	0.18
(11)さらに考えたり、調べたりする	0.20	0.28	0.14	0.26
(12)体験的学習から学んだ	0.11	0.20	0.12	0.22
(13)人のためになることは進んでする	0.13	0.24	0.17	0.17
(14)意見の違う人とも協力する	0.14	0.22	0.19	0.20
(15)役割は最後までやり抜く	0.23	0.24	0.19	0.28
(16)友達や先生と休日の話をする	0.14	0.24	0.13	0.28
(17)休日の体験が役立った	0.14	0.23	0.13	0.27
(18)休日の体験をクラブ等に生かす	0.20	0.19	0.18	0.15

(数値は相関係数 ±0.2 以上に網掛け)

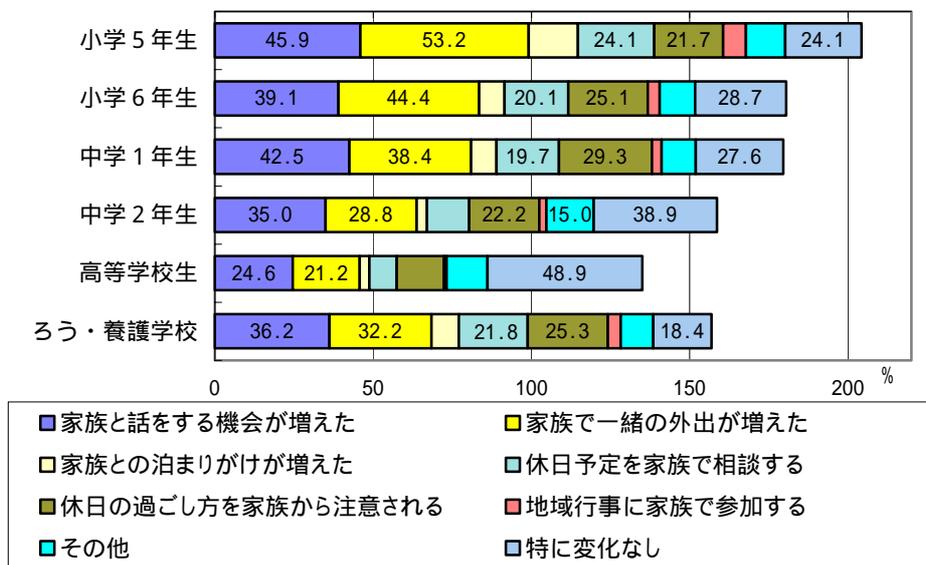
3 休日の過ごし方のタイプと家庭の様子

学校週5日制の趣旨を考えると、家庭にも何らかの変化があると予想される。次頁のグラフ 19 は、児童・生徒が感じている家族・家庭の変化について尋ねた結果である。

まず、変化を尋ねた設問ではあったが、「特に変化なし」と答えた割合が、高校生で 48.9%、中学2年生で 38.9%に及んだ。しかし、変化としてあげられた項目の中では、小学生では「家族と一緒に出かけることが多くなった」が、中学生、高校生、ろう学校及び養護学校の生徒では「家族と話をする機会が多くなった」が最も高くなっている。また「休日の過ごし方につい

て家族から注意されることが多くなった」は、中学1年生が最も高く 29.3%であり、「休日の予定について家族で相談することが多くなった」とする割合が小学生で20%を超えている。

グラフ 21 休みが増えたことに伴う家族・家庭の変化(複数回答)



以上のような家族・家庭の変化は、児童・生徒にどのような影響を及ぼしているのだろうか。

児童・生徒が感じている家庭・家族の変化と先に示した休日の過ごし方に関する二つの軸との関連を表14に示した。

網掛けを施した箇所を検討してみると、いずれも「計画性・

主体性」との関連であった。その中で、負の相関を示しているのは小学校の「特に変化なし」だけであり、その他は正の相関であった。負の相関では、「計画性・主体性」の傾向が高い児童・生徒は、「特に変化なし」を選択していないという関係があることを示している。

表 14 二つの軸と家庭・家族の変化

質問項目	因子	小学生		中学生		高等学校生	
		活動の多少	計画性・主体性	活動の多少	計画性・主体性	活動の多少	計画性・主体性
家族と話をする機会が多くなった		0.07	0.26	0.07	0.22	-0.05	0.20
家族で一緒に出かけること		0.12	0.17	0.05	0.21	-0.11	0.25
家族と泊まりがけで出かけること		0.00	0.10	0.00	0.07	0.06	0.13
休日予定の家族での相談が増えた		-0.02	0.23	0.07	0.21	0.05	0.18
休日の過ごし方を家族から注意される		0.13	0.01	-0.05	0.00	-0.03	0.05
地域の行事に家族で参加する		0.02	0.12	0.01	0.15	0.00	0.00
その他		-0.15	-0.02	0.12	-0.02	0.18	-0.06
特に変化なし		-0.07	-0.20	-0.07	-0.18	-0.06	-0.10

(数値は相関係数 ±0.2以上に網掛け)

正の相関として全学年に共通している変化は、「家族と話をする機会が多くなった」であった。また、「家族で一緒に出かけることが多くなった」は中学校と高等学校において、「休日の予定について家族と相談することが多くなった」は小学校と中学校において、それぞれ相関関係が見られた。相関関係は因果関係ではないため、単純に結論を出すことはできないが、休日の過ごし方に関する「計画性・主体性」が、家族・家庭での会話やふれあいの増加する中で、より促進されているのではないかと推察できる。

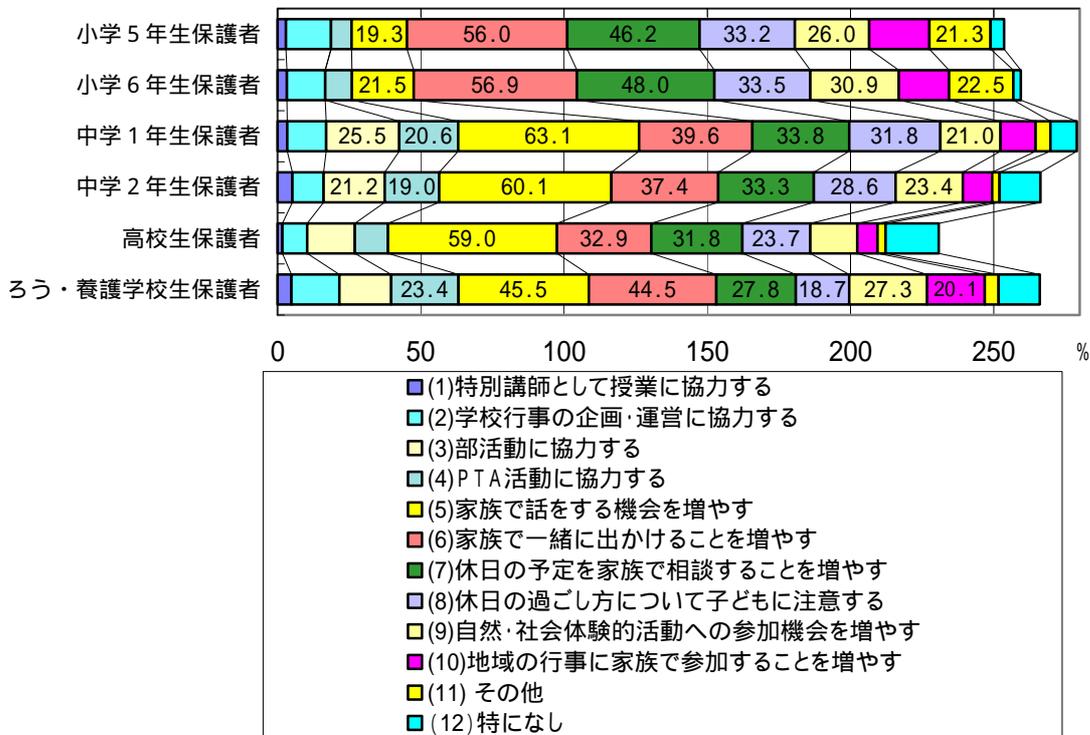
学校週5日制実施における保護者・家庭の対応

1 保護者・家庭での取り組み

これまでに児童・生徒に自由な時間を主体的・計画的に使いこなしていく力は、学校だけでなく、家族・家庭での会話やふれあいの中で促進されているのではないかと述べてきた。学校週5日制の趣旨の一つが「児童・生徒を家庭、地域にもどす」ことであるとするならば、保護者・家庭が自らどのような取り組みをしようとしているかが重要であり、学校の支援は、保護者・家庭の取り組みを促進させていくような方向で求められていると言える。

グラフ22は、学校週5日制が始まって保護者として意識してやってみようと思うことを尋ねた結果である。

グラフ22 保護者として意識してやってみようと思うこと(複数回答)

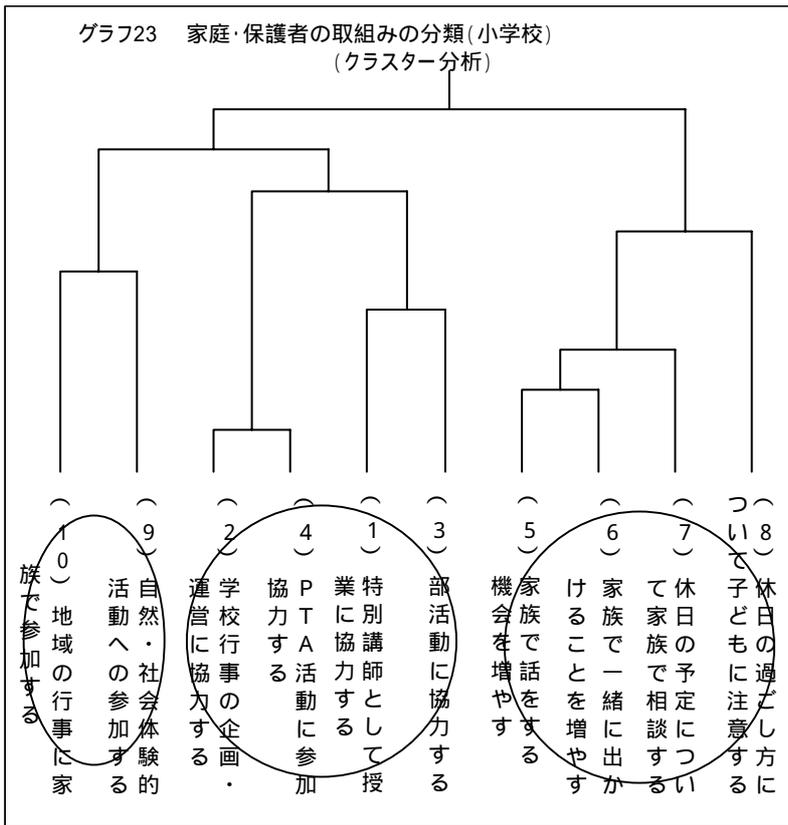


全体としては、「家族で話をする機会を増やす」「家族で一緒に出かける機会を増やす」「休日の予定を家族で相談することを増やす」といった割合が高くなっている。中学校と高等学校では、「家族で話をする機会を増やす」を60%前後の保護者が選択している。日頃の会話不足を実感しての選択も多いと思われるが、ここには、学校週5日制をきっかけとして親子の会話や触れ合いの機会を何とか増やそうとする姿を読み取ることができる。さらに、先に示したように、休みが増えたことに伴う家族・家庭の変化として、30%を超える児童・生徒が「家族と話をする機会が多くなった」と答えていることから、この取り組みの一端を確認することができる。今後も、ふれあいや会話の機会を促す具体的支援を、より多くの保護者・家庭に対して続けていく必要が感じられる。

それ以外の取組みとしては、小学5・6年生及び中学1年においては「休日の過ごし方について子どもに注意をする」が30%を超えている。また、「自然体験や社会体験への参加の機会を増やす」は、高等学校を除いて、いずれの校種でも20%を超えている。ろう学校及び養護学校においては、「地域の行事や家族で参加することを増やす」「PTA活動に協力する」が、他に比べて割合が高かった。

2 家庭の教育力、地域の教育力を高める学校の役割

本設問は、複数回答であり、12の選択肢の中から平均すると一人2.3個の取組みが選択されている。グラフ23は、統計的手法(クラスター分析)を用いて、回答の組み合わせの中から類似性の高い選択肢を整理したものである(トーナメント表のような図において、距離が近いものほど、類似性が高いことを示す)。

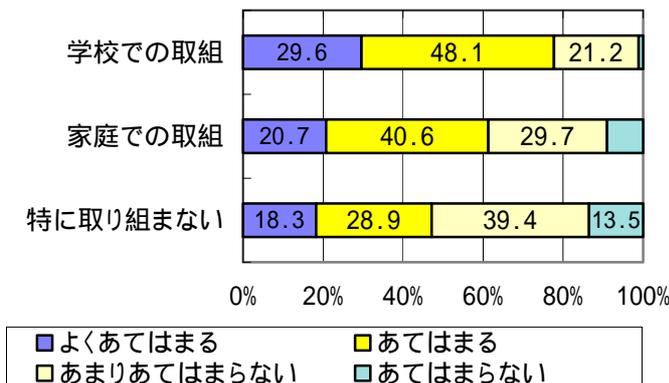


それによると、学校週5日制が始まって保護者として意識してやってみようと思う取組みは、選択肢の(5)(6)(7)(8)に代表される「家庭での取組」とそれ以外に大きく分けることができることが分かった。さらに、それ以外の取組みにおいては、選択肢(2)(4)(1)(3)に代表される「学校での取組」と(9)(10)に代表される「地域・社会での取組」とに分けられることが分かった。

この3分類に、「特に取組はない」の回答を加え、それぞれに特徴を「子どもとのかかわり方に関する質問項目」との関連から明らかにすることで、今後の学校における支援の方向性を確認したい。

例えば、グラフ24は、「他の親と子育てについて話す」(小学校)との設問に対する回答の違いを示したものである。子育てについて他の親と話す機会の重要性は、家庭の教育力を高める上で、今日ますます重要になってきているが、他の親と子育てについて話す機会が多い傾向にあるのは、家庭での取組みを意識している保護者よりも、学校での取組みを多くあげる保護者に多いことが分かる。

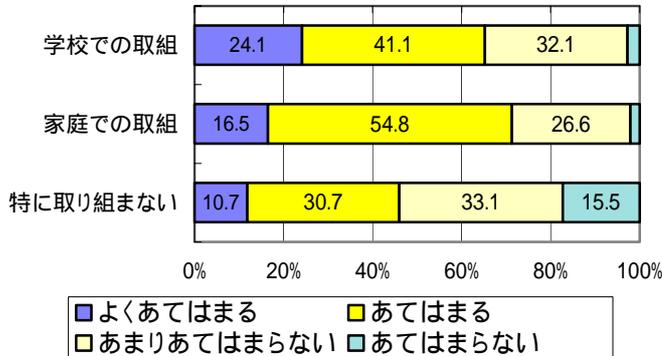
グラフ24 他の親と子育てについて話す(小学校)



またグラフ25の「子どもに家での役割があるかどうか」の設問に対する回

答では、家庭での取組みを多くあげている保護者が、「よくあてはまる」「あてはまる」を合わせると、子どもに家での役割をもたせている傾向が強いと言える。とはいえ、「よくあてはまる」

グラフ 25 子どもに家での役割がある(小学校)



に限定すると、学校での取組みを多くあげる保護者にその傾向が強いことが分かる。

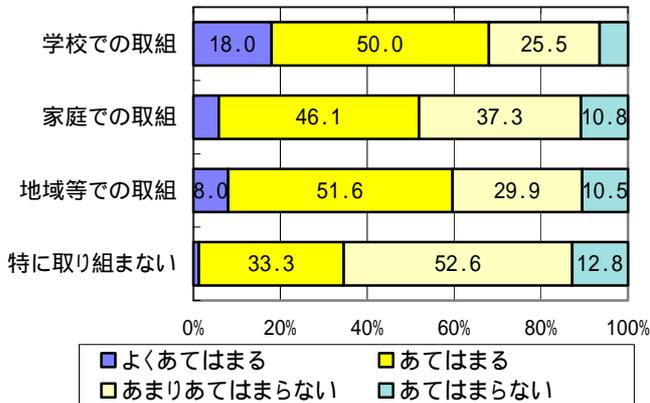
生活時間等の経年変化調査の結果からは、家での仕事(お手伝い)の傾向が少なくなってきた課題があることを述べたが、学校週5日制が実施されることで、意識して学校や家庭での取組みを行おうとしている保護者ほど、こうし

た課題に対応した取組みができているようにも思われる。

上記二つの結果からは、学校週5日制の実施をきっかけとして、保護者・家庭が、家庭での取組みはもちろんのこと、例えば「学校行事の企画・運営に協力する」などの学校での取組みをも意識していくことができる働きかけ(学校とのかかわりを常にもてるような働きかけ)を積極的にしていくことが、結果的に家庭の教育力を高めることになると思われる。

同様に、学校での取組みを意識していくことが、家庭の教育力のみならず、地域の教育力をも高めることへつながる可能性があることを、グラフ 26 から読みとることができる。

グラフ 26 他の子どもでも注意する(中学校)



グラフ 26 は、「他の子どもでも気になることは注意するようにしている」(中学校)に対する回答の違いを示したものである。ここからは、他の子どもでも注意をする傾向は、家庭での取組みを意識している保護者よりも、地域等での取組みを意識している保護者、さらに、学校での取組みを多くあげる保護者に多いことが分かる。すなわち、「他の

子どもでも注意する」ことに代表される意識は、単に家庭での取組みを意識しているだけでは、高まるものではなく、地域での取組みや学校での取組みを意識すること(そういう働きかけがあること)で、高まるのではないかと考えられる。

学校週5日制の趣旨の一つは、学校・家庭・地域社会がそれぞれに役割を認識しつつ、相互に連携していくことにある。確かに、家庭のことは家庭で、地域社会のことは地域社会がそれぞれに役割と責任を果たす必要があるが、今回の調査結果からは、総じて、学校の与える影響と、その役割の大きさが感じられる。

研究のまとめ

1 調査研究を通して明らかとなったこと

本調査研究の特徴は、第一に、幼児・児童・生徒の生活実態について、26年前からの経年変化を踏まえながら明らかにしたことである。ここからは、児童・生徒の自宅での学習時間が総体的に減少してきていることや遅く寝て遅く起きるといった基本的な生活習慣の乱れ、家庭での会話やふれあいの極端な欠如といった現状が浮き彫りになった。また、起床時刻や就寝時刻などは、平日と休日とが一体的・連続的な関係にあることを示した。

第二は、幼児・児童・生徒の休日の過ごし方の特徴をその量的な把握とともに、過ごし方の意識を含めてとらえたことである。ここでは、幼稚園児から高等学校、ろう学校及び養護学校の生徒までの特徴を整理するとともに、例えば中学校の部活動に見られるような頻度の両極化傾向が見られる活動やボランティア活動や地域活動などまだまだ機会が十分でない社会体験・自然体験活動などの実態に注目した。さらに、休日（自由な時間）を計画的・主体的に使う力に着目し、こうした力の有無が過ごし方の質を豊かにする原動力になることを明らかにした。

そして第三は、幼児・児童・生徒の休日の過ごし方と学校及び家庭での過ごし方との関連を把握したことである。ここからは、休日を計画的・主体的に使う力は、日頃の学校での過ごし方、とりわけ考え続ける力の育成や体験的な活動などと結び付いていることや、保護者・家庭での会話頻度やふれあいとも関連していることを示した。さらに、家庭の教育力や地域社会の教育力を高めていく上で、保護者・家庭への働きかけを通して、学校が大きな役割を果たすことも明らかとなった。以上の結果から今後の学校の在り方と指導の方向性を確認したい。

2 学校の在り方と指導の方向性

第一は、児童・生徒の学習時間が、総体的に減少してきていることを踏まえ、例えば「朝の読書活動」の取組みを積極的に進めるなど、学習意欲を高め、学習の習慣化をより強めるような指導を積極的に工夫していくことである。

第二は、自ら考え、自ら行動する指導内容をより充実させていくことである。日々の授業においてはもちろんのこと、例えば、地域社会の多様な情報を集め、学校での学習が、児童・生徒の休日や余暇の活動とつながるような体験学習を工夫することなどである。

第三は、幼少期から、「よく食べ、よく遊び、よく眠る」といった生活習慣の確立に向けた取組みを大切にしていくことである。平日と休日の生活時間は強く関連していることなどを意識して、養護教諭が家庭に向けて児童・生徒の生活実態を話すなどの取組みが考えられる。

第四は、学校が家庭・地域社会との情報交換に中核的な役割を果たし、幼児・児童・生徒が、多くの大人に見守られて育つ環境づくりを進めることである。例えば、校内に地域社会担当分掌を置くなど、関係する諸機関との連携を密にして、教育懇談会などに積極的に参加し、学校とのかかわりを通して、家庭や地域社会に育ち合う人間関係を作り出していくことである。

3 今後の研究課題

本研究は、教員を調査対象としていない。今後は、本調査の結果を踏まえ、教員の意識や行動の関連を探ることが必要である。さらに、研究の結果を教員、家庭・保護者、地域社会及び行政（社会教育関係者）で共有化する手だてを講じることで、課題解決の手掛かりを総合的に検討していく必要がある。